

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- NPO法案を考えよう P 2
- 自然を見る目を培う P 5
- 萱野茂さん講演会要旨 P 7



太行山脈のなかにある広霊県平城郷。この子どもたちの通うことになる小学校に果樹園をつくったいきさつは... (4ページ参照)

GENに参加するには

- ☆会員・会報購読者になる
- ☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ☆ワーキングツアーに参加する
- ☆ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- ☆使用済みテレカ・オレカを集めて送る

etc. あなたのご参加を待っています!

1996・3

44

NPO法案を考えよう

ご意見おまちしています

日本の社会でボランティア団体やその他の市民の活動（NPO＝非営利団体と総称します）が無視できない存在になっています。とりわけ昨年の阪神淡路大震災で、行政が機能を喪失するなか、さっそく動きはじめたのはボランティアの活動でした。

しかしそれらのグループの多くは、緑の地球ネットワークもそうですが、法人格のない任意団体です。銀行口座を開くにも、電話をつけるにも、個人名義でしかできず、とても不便です。継続的な活動を保障するためには、法人格の取得、財政的な基礎づくりの便宜が不可欠です。

こうした活動を発展させる環境づくりのために、法的整備（通称NPO法案）をはかる動きが昨年からすすんでいます。新進党の法案は昨年秋の臨時国会に提出され継続審議になっており、連立与党案も3月上旬に提出され、順調にいけばこの通常国会で成立の見込みです。あわせて、一定の条件を備えた団体には、事業や寄附金にたいする免税措置を講じる動きもあります。

市民活動にとっての生命線は、自主・自律です。そのことは私たちも活動のなかで痛感しています。このような法や、それにもとづく行政のコントロールが、市民団体の動きを制約するものであれば、新しく生まれつつある動きをむしろ殺すことにもなりかねません。法案とその審議に注目し、よりいい制度になるよう求める必要があります。

緑の地球ネットワークは設立の当初から、法人化を将来的な課題としてきました。昨年2月の第2回会員総会で、もっとしっかりした組織に発展させる

べきだという提案があり、「NPO法案」の進行をもにらみながら、ことし5月に第3回総会を開こうということで集約されました。

世話人会でもことし6月初めに総会を開くことを検討しましたが、法案を

もっと簡単な法人の話

法人化なんていわれても、いまひとつピンとこない...のは、筆者だけではないはず。世話人会だけで決めるわけにはいかないし、総会の当日議論をするには時間がたりません。だから、まえてもって会員のみなさんによ〜く考えて、意見を聞かせてほしいのです。

おおわくは既述のとおりですので、考える材料として、先日フォーラムで聞いてきたなかから印象深かったお話をいくつか紹介します。

●合意づくり

NPO法案は、どういう制度にするかも問題だが、NPO内部での合意づくりも問題である。法人化の必要性を痛感しているのは資産（あるいは借金！）の名義人や財務担当者だけで、一般の会員は無理に法人化しなくてもできることをすればいい、という人が多い。そのギャップをどう埋めるか。

●財産管理

任意団体の資産は全て個人名義。たとえば車が必要な場合、NPOの会計からお金を出して買った車も団体名義にできない（大同事務所にあるのにGENにないのはこのせいかな？）。また、万一の場合、相続・相続税の問題がある（現実におこっている）。

●継続・安定

阪神大震災後にたくさんできたボランティア団体のうち、いまも活動して

めぐる動きが現状のようになっています。法人化などへの議論をつづけながら、もうすこし事態をみきわめて、総会の開催時期を決めようということにしています。

法人化の問題は、いずれにしろ、緑の地球ネットワークのあり方にもかなりの影響を与えることになります。会員その他のみなさんがご意見をお寄せくださるようお願いいたします。

いるのは企業や財団法人などの大きなバックのあるところだけ。本当の意味での“草の根”団体は、多くが息切れして消えてしまった。熱意だけでは続けられない。スタッフの生活を保証できないと人も集まらない。

●当事者能力

財産管理にも関係するが、任意団体は契約の当事者になれない。財政をおぎない、活動を広げるために事業を始めようとしても、銀行取引もできない。行政のイベント企画などの仕事があっても直接受託できず第三者経由になる。

●監督官庁にしばられる？

NPOの場合、監督官庁は地方自治体になりそうだが、そこからいろんな注文がつくことが考えられる。実際、せっかく法人格（財団法人）をとったのに、監督官庁の干渉によって活動の自由が奪われたという話も聞く。

●行政の仕事を肩代わり？

今後ますます大問題になる福祉を、NPOに肩代わりさせようとしている、というみかたもある。

どんなNPO法案がとおるのか、あるいはとおらないのか、よくよく気をつけなきゃいけないけど、新聞などでNPO法案の文字を見かけたら目を通してちょっと考え、ご意見をGEN事務所まで聞かせていただければ幸いです。



NPO法案をもっと知りたい方へ

なるほど会員の意見がほしいのはよくわかった、でも判断材料が足りない、という方。GENの事務所においでいただければ、手元にあるかぎりの資料は閲覧できます。ただし、郵送・ファックスはご容赦ください。NPO法案に関して活動しているグループで連絡先がわかっているところをご紹介します。

市民活動の制度に関する連絡会 東京都千代田区飯田橋4-4-50市民活動を支える制度をつくる会 Cs 気付
TEL. 03-5210-3526



グリーンアースダイヤルで 黄土高原に緑を！

緑化協力の規模がしだいに拡大するなかで、財政基盤を確立するために企業の協力を模索してきましたが、このたび国際電信電話（KDD）とタイアップして、「グリーンアースダイヤル」をスタートさせました。

あらかじめ登録した電話から（電話番号、住所、名前、名義人名が必要）、「001」をつうじて国際電話をかけると（どこの国でもかまいません）、通話料に応じて、KDDから緑の地球

ネットワークへ自動的に資金協力がおこなわれるしくみです。登録者には手続き料その他、負担はいっさいかかりません。

もし1,000円の通話だと、黄土高原で50本の松の苗木か、2本の果樹苗が買えます。

年間100,000円になれば、25アール（750坪）に800本の松を植林することができます（労賃・管理費を含む）。

費用も手間もかけないで、国際緑化

協力をすすめることができます。

2月下旬から試験的にはじめたところ、かなりの人が登録されました。大部分の人が資料を希望されますので、活動の広報にもつながります。

用紙はコピーしてつかってもいいですし、必要項目をFAXやE-MAILで送ってもらってもけっこうです。同封した以外に用紙が必要な場合はGENまでご連絡ください。

広がる関心～ 黄土高原の緑化協力

黄土高原の緑化協力のたいして、しだいに関心が広がりつつあります。2月は3つのところで講演会やフォーラムがおこなわれ、高見事務局長が出席しました。

●国際ソロプチミスト宝塚

2月20日午前、例会に先立って、スライドをみてもらいながら、黄土高原の実情と緑化協力の進行ぐあいについて報告をしました。日本の私たちが手軽にできる小さな協力が、現地ではたいへんな規模の植林につながることに、驚きの声があがりました。その場で資金協力が呼びかけられ、61,500円が寄せられました。

●のしろ国際交流のつどい

秋田県能代市教育委員会などの主催で、2月24日午後で開催され、高校生からお年寄りまで百数十名の参加がありました。最初に「よみがえれ緑！ 沙漠化進む黄土高原に」のテーマで高見事務局長がスライドをつかって報告し、そのあと干場草治さん（能代山本フォーラム21代表）、下荒地修二さん（外務省国際情報局参事官）といっしょに「いま地球人として中国を知りたい」と題するパネルディスカッションをおこないました。時間がたりなくらい参加者からの質問や意見がたくさ

んで、とても活気にみちた集いでした。

●大阪鶴見ロータリークラブ

2月27日のお昼に開かれました。これまでつづけられてきたクラブの国際協力の状況が報告され、そのあとのフォーラムで、まずは「黄土高原に緑を！」のビデオをみてもらい、私たちの活動を報告しました。厳しい環境の

もとで、地元の人たちと密着してすすめられている環境修復活動に、つよい関心をもってもらえたようで、今後の協力を検討するとのことでした。

黄土高原での緑化協力も5年目を迎え、じょじょに反響が広がってきていることを感じさせられたこの1か月でした。

もうすぐ出発！ 春の黄土高原へ

大同から3月4日に届いたファックスでは、黄土高原はまだ冬のように寒く、雪は少ないが風が強い、ということです。それでも、心は春のように暖かく、忙しい季節の到来にむけて準備をはじめています、と祁学峰所長はじめ大同事務所のメンバーははりきっているようです。

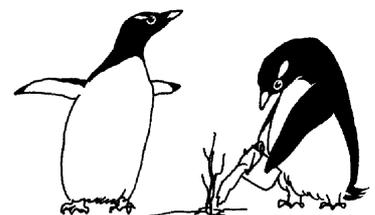
大同事務所の春はワーキングツアーの受け入れ準備ではじまります。まだ寒い各県のなかから、どこで植樹が可能か、宿泊や農家での昼食の手配は、など諸条件を調べ、GENからの要望と照らし合わせて調整します。まだ寒いのに北の方の万里の長城の村に行きたいなんていうものだから、大同事務所は直前まで調整に走り回らなければなりません。

一方大阪ではメンバーの募集から事

前準備をはじめます。今回、なんとはいじめて申し込みお断りができるという事態にあいになりました。飛行機の座席を20人確保していたところ、足りなくなってキャンセル待ちになってしまったのです。お断りした方、ごめんなさい。でも、夏と秋がありますから、あきらめないでくださいね。

今回のメンバーは17歳から78歳までと年齢層がひろく、事務局を除いて27人、うち2回目の参加者が6人です。春休みとあって学生さんも多く、にぎやかなツアーになることでしょう。

また、4月8日からは全ジャスコ労働組合から31人のツアーが派遣されます。春の黄土高原を満喫してきてください！



忘れがたい平城郷

果樹園建設はこうして決まった

緑色地球ネットワーク大同事務所長 祁学峰

昨年(2010年)の12月、アンズ(仁用杏)の栽培状況を調べるために、広霊県平城郷の北部山地を訪れたところ、その農民たちがうれしそうに私に話してくれました。この2年間、日本の友人たちの支援と参加のもとに、かれらは大面積の経済林(果樹園)を建設し、また郷政府の支持のもとで「青年養豚場」を建設したために、農民の生活が大きく向上したというのです。

思い出せば2年前の早春、私と高見さんが初めて平城郷を訪ねた日の夕刻、黄土高原の寒々とした風が吹きささんでいました。郷政府の幹部が話してくれたところでは、北部山区の年間降水量は200mmに達せず、自然条件は劣悪で、農民の生活水準はたいへん低く、1人あたり年間収入は300元に及ばないということでした。

なんととしてもそこに行きたいと高見さんはいうのですが、交通がたいへん

不便で、車の通れる道がありません。私と高見さんは途中から牛車にりましたが、そこに行くのは容易なことではありませんでした。空は黒々とし、風が強く、黄砂がもうもうとまきあがっています。通訳の馮艶さんは凍りついて多くを話しませんでした。

そのような環境のなかを、私たちは何軒かの農家を訪ねました。条件はた

いへん苦しいのに、農民たちはとても純朴かつ善良で、とても深い印象を私たちに残したものです。

このような経過をへて、平城郷北部山区は私たちの緑化協力の重点地域の1つになりました。2年来、農民たちのたいへんな労働をへて、地域の環境は一步一步改善され、植えた果樹は日を追って大きくなっており、このことが引き起こした人びとの頑強な生存意識はなによりも尊いものだと思います。

この変化をみて、私はとてもうれしく思います。まだまだ苦労は大きく、しなければいけないことはたくさんありますが、すでに希望をみつかることはできました。人びとが今後、努力を怠らなければ、すべてはずっとよくなるにちがいないと思うのです。



平城郷で出会った老夫婦。突然の客を暖かく迎えてくれた

緑の中国 歴史篇 2

上田 信 (立教大学助教授)

紀元前7世紀ごろ、いまからざっと3000年ほどまえの周の時代に人びとにとって欠かせないものが歌謡でした。白川静氏の説によると、「歌」は古くは「訶」と表記されており、この字は



黄河の水も昔は澄んでいた

「言+可」、「可」は祝詞を入れる器を示す「口」と木の枝を示す「丁」という記号を合成したものだということです。木の枝を手にして器の前で神がみにうったえかける儀礼がおこなわれ、そのときに発せられる言葉には抑揚とリズムをつけられ、日常の言葉とは区別されていました。それが「訶」であり、のちの歌謡の起源となったと考えられます。こうして生まれた歌謡は、周の王室や各地の諸侯の宮廷に所属していた楽師たちが口づたえにつたえ、のちに『詩経』としてまとめられます。

現在の山西省の南西部、汾河と黄河の合流点ちかくに魏という国がありました。そこで歌われた歌謡に「伐檀」

という表題が付されたものがあります。その冒頭を掲げてみましょう。

坎坎伐檀兮(カンカンと榎を伐る)
眞之河之干兮(これを河のほとりに置く)

河水清且漣漪(河水清くして、且つ波立つ)

ここで「檀」とあるのはエノキだと推定されます。この歌を読むと、斧で伐採し今の黄河のほとりに置く作業をしていると、目の前には河の水は澄みきって波立っているという情景が目の前に浮かんできます。のちの道学者は「黄河」が清いわけではないという思い込みから、現実にはない理想を描いたものと解釈するけれど、その解釈にはむりがあるようです。おそらく周の時代には本当に黄河の水は清かったと考えた方がよいでしょう。



自然を見る目を培う

立花 吉茂 (GEN代表、花園大学教授)

わかったようで、よくわからないのが自然だと言ってしまえばそれまでですが、「自然とは」と聞かれたら意外に答えにくいことに気がきます。

自然流 (じねん流)

昔は、人間に関係のない大「自然」と、人間くさい「じねん」とに分けていたようです。「風邪をひいたけれど、自然に治った」という自然はじねんの方で、これには剣道の自然流とかいうのがあったような気がします。「原生林は自然」というのは人間に関係のない本当の自然でしょう。達磨大師の言だったと思いますが、「結果自然来」というのがあります。これは無理に術・策をめぐらせても自分の思うようになるとは限らない。「策士、策におぼれる」といったような意味だ、と習ったことがあります。これも「自然・じねん」の方でしょう。しかし、よく考えると起源はひとつであることに気がきます。人智の及ばぬものごとを「自然」に置き替えたのに過ぎません。

生態学でいう自然は英語のNATUREで、人手の加わっていない生態系の存在するところ、ということになりますから、やっぱり「人工」の反対が「自然」ということになります。

半自然の存在

人工即ち人為的なものの反対が「自然」であるなら、人間がほんの少しだけ手を加えた場所があったら、もうそれは自然ではないのでしょうか。もしそうなら、もう地球上に自然は存在しません。海も山も大気も汚染しているからです。もっと身近な場所を眺めてみましようか。原生林に入って何本かの高木を切り倒したとしましょう。この原生林の一部に穴が開いて一時的に自然ではなくなりますが、何年か経つともとの状態に戻ってしまい、自然は回復します。こう考えると人間と自然とのつき合いは、時間的要素が加味されることによって自然であったり、反自然(人工)であったりすることにな

ります。もっともよい例は日本の里山です。里山は人工的にできた二次林で構成されています。都市近郊の山に登ると、アカマツやコナラを中心にした雑木林になっています。人びとはそこに入ると「自然っぽい」と言いますが、それは本当の自然ではありません。燃料や肥料に用いるために管理された人工的二次林なのです。最近では、もうこのような管理作業もほとんどおこなわれていませんから、年々遷移が進んで本来の自然林へと回復しつつあります。二度と手を加えなければ200~300年もすればもとの原生林になることでしょう。二次林は自然なのでしょう、それとも反自然的な人工林なのでしょう？無理やりにどちらかに決めたら不自然ですね(ここで笑ってください)。

わたしたちは、二次林や田畑のように、もともと人間が関係した場所でも、そこに自然の循環が存在している場所は半自然と呼ぶことにしています。みんなが自然と思っている場所でも変質していない生態系が存在する場所はきわめて少ないからです。

戻る自然と戻らない自然

日本の山々には必ず緑があります。たいていは植林された杉山か雑木林の二次林です。日本では300~500年も放置すると遷移によってもとの原生林に戻ります。しかし、こんなに恵まれた国はまれで、多くの国ではいったん失われた森林はもとに戻ることがないのです。それは伐採によって、地面が急に明るくなり、日中は暑く、夜は寒くなり、日光の直射で乾燥し、雨が降る



六甲再度山の緑は自然？ 人工？ (緑色地球ネットワーク訪問時)

と樹木が吸収してくれなくなったので、流亡がおり、急に環境が変わってしまい、いままで主役だった樹種の二代目は育つことができなくなってしまうからです。その点日本のように多数の樹種から成り立っている森林では、このように急に変化した環境にでも生きてゆけるパイオニアと呼ばれる陽性植物が含まれているため、彼らが地面をしっかりと守って、年々落葉を貯えてくれるのです。そして遷移が進んで雑木林となり、さらに進んで、社寺林などから原生林の樹種の種子が鳥などに運ばれて芽生えし、原生林が復活できるのです。このように、日本の森林は復活できる森林ですが、なぜこのようになるのか、考えてみますと、暖かさや雨の量がたっぷりあることが主な原因です。水が不足すると単純な少数の主役からなる森林しかできません。このような森林を伐採すると森は復活できず、沙漠化が進みます。このような場所が地球上に増加しています。このような場所は人間が木を植えてやれば復活できるのです。もとへ戻ることのできる森林が伐採で消失したら、植えてやればよいのです。わたしたち緑の地球ネットワークが進めている黄土高原緑化のお手伝いは、もとへ戻れる森林跡の黄土なのです。

自然とともに生きる

アイヌモシリをまもるために～

『緑の地球』前号(43号)でも報告しましたように1月20日、GENチコロナイ部会とORC200連絡協議会共催で『萱野茂講演会』がおこなわれました。おかげさまで参加者300人の大成功で、講演もアイヌ古式舞踊も、有意義で楽しい時間を共有することができました。今回、萱野茂さんの講演の要旨を掲載いたします。紙面の都合で不十分な要旨ですが、ご容赦ください。

講演のビデオは、大阪市立弁天町市民学習センター(TEL.06-577-1430)で見られますので、ご利用ください。

萱野茂講演会

『アイヌ・人と自然の共存』要旨

●シサムウタラとして

アイヌ語でアイヌは「人間」という意味。本当にいいアイヌを「アイヌネノアンアイヌ」と重ねて言う。健康なのに働かないで食うにも困る人を悪いやつ「ウェンベ」と言う。最初に北海道に来た日本人はよい人で、鍋や椀などをもって来た。アイヌはいい人たちが来たのと仲良く暮らし、「シサムウタラ(良き隣人)」と呼んだ。しかし明治に入る少し前から日本人が雪崩のように押し寄せ、アイヌの生活を奪った。それから悪いやつと呼ぶようになった。今日のみなさまをシサムウタラとして話をしたい。

●アイヌの権利回復はサケから

1926年に二風谷で生まれた。アイヌ語は日本語をしゃべられなかった祖母との会話で覚えた。すでに亡くなっていた祖父は12歳のとき、日本人のアイヌ狩りにあった。強制徴用で夫にさせられた。130年前の記録だと二風谷村戸数27戸110人のうち、47人が徴用され、村には子どもと年寄りだけが残った。祖父は大けがをしたら村に帰られると考え、刃を使って自分で指を切った。だが、親方は「塩をつければなおる」と言った。次にフグの胆汁を体に塗ったら、体が変な色だとやっと帰してもらえた。

父はアイヌ語と日本語のはざまに生きて人で両方の名前をもっていた。ある日、家に警官が来た。父は板間にひれ伏して泣いた。戦争で父は右目がなかったが、右目からも涙が出た。実はサケの密漁で逮捕された。サケはアイヌにとって「シエペ(本当に食べるもの)」と呼ぶほど大事な主食だったの

に、日本人はアイヌがサケを取ってはいけない法律を作った。昨年1年間で5,245万匹のサケを日本人が取っているが、アイヌが取ってよいのは3年前まで25匹。目の前で父が連れていかれ、なおさらアイヌ権利回復の第1条件として、「サケぐらい自由に取らせてくれ」と思う。

シカもたくさんいた。しかし、明治に年間65,000頭も日本人が取って缶詰にして輸出した。

北海道にはアイヌの地名が少なくとも8,000か所あった。そこへ日本人が来て「無主地」としてアイヌに断りなしに日本国へ組み込んだ。地名があるのに無主地とはおかしいことだ。東北にもアイヌ語の川や沢の地名が280か所ある。北方領土も日本人に返したらリゾートができ、自然破壊になる。

●アイヌ語で引導わたしを

アイヌの村では人が死んだら男が引導わたしをした。父には2人の仲間がいた。父が一番先に死んだが残りの仲間は「先に死ねて幸せだ。俺が死んだらだれが送ってくれる」と泣いた。そのとき、自分の民族の言葉の大切さを知った。14年前にアイヌ語教室をはじめた。今13か所ある。1か所に160万円の補助が出る。アイヌ語を残そうとの気運がでてきた。

4、5代前の日本人はアイヌにひどいことをした。しかし、それを直すかどうかは今のあなた方の手にゆだねられている。

●自然とともに生きたアイヌ

アイヌは自然と一緒に生きてきた。鹿や熊を取っても、内臓は鳥や他の動



アイヌ語をまじえて語りかける萱野茂さん(写真上)衣裳の紋様、踊りの手振りのひとつひとつに自然とともに生きるアイヌ文化が感じられた(写真下)

物のために置いていった。サケを取っても、きれいに洗って一部をキツネの分、カラスの分と川原に置いた。ネズミが穴に埋めた栗を取るときも、栗の代わりに栗やヒエを少し入れてあげる。木や動物の名前もその特徴をとらえて名をつけた。自然との関わりのことは昔話にして母が教えてくれた。

ネズミが木をかじるのは間伐の役目をする。だのに、ヘリコプターで葉をまいてネズミが死ぬ。それをキツネが食べて死に、そしてそれを食った熊が死ぬ。こんな自然を壊すことをする。

北海道は見た目は自然が残っているが、実際は違う。川にメダカ、カエルがいない。ヘビ、トカゲもいない。最後には「あなたが消えた。私が消えた」になる。せめて30年前に後戻りしよう。1人ひとりが自然を大事にしようという勇気を出さないと、子、孫が生きていける世界でなくなる。(文責: GENチコロナイ部会)

萱野茂さんの著書

『妻は借りもの』北海道新聞社刊

『アイヌの碑』朝日新聞社刊

『アイヌの里二風谷に生きて』北海道新聞社刊

♪小さい春見つけた♪

～自然と親しむ会 箕面の森に春を探しに～

富田 幸代 (主婦)

「本当にやるんですか？」前日に雪が降り、こんなお問い合わせをたくさんいただきましたが、本当にやりました。寒さにもかかわらず、30人近くの方が参加され、石原忠一さん、山中澄雄さんの案内で早春の箕面の森を歩きました。

おうい雲よ

ゆうゆうと

馬鹿にのんきそうぢやないか

どこまでゆくんだ

ずっと磐城平の方までゆくんか

石原先生は歩き始める前に、山村暮鳥の詩を心にとめておくようにと言われました。足元ばかりに気をとられず、一日の山歩きのなかでときには立ち止まり空を見上げ大きく地球を感じながら地球のなかにあるこの山を探索していきましょうということでした。

山があってその向こうには何があるのでしょうか。そのときのその学習も大切ですが、もっと大切なのは、自然のなかにいる自然の一部である自分に気づくことではないかと思います。なかなか難しいことですが、この春さがしもきっとそれを知る一步になったと

思います。春間近のそれでも寒い山にこの季節にしか出会えない植物たちの姿や景色が心に残っているのですから。

先生は他に、季節を変えて知っている場所を歩いてみてください、そして木や花をスケッチしてみてくださいとおっしゃいました。スケッチしてなるほどたくさんの「？」が出てきました。いろいろなことを知って感じて、こうして一人ひとりの自然観ができてゆくのでしょうか。自然観は個人個人全く違うものだと思います。反対にいうと自分の自然観だけが全てではないということです。かたくなにならず、みんなで

美しい自然を満喫することは幸せなことだと思います。

みなさん、人間はどうしても知識に頼りがちですが、そこをグッと押さえて心で木々と語り合いませんか。星野さんの詩でわたしも好きな詩があります。花の名前を知らない。そのことが今朝はばかに嬉しい。花だってたぶん自分につけられている名前を知らないで咲いている。気楽に山の散歩ごいっしょしませんか？

※編集部注 冒頭の詩は思潮社現代詩文庫『山村暮鳥詩集』によりました。



自分の感性で自然とむきあうと、新しく見えてくるものがある

チコロナイ学習会の

お知らせ

- 日 時：4月13日(土) 16時～18時
- 内 容：未定です。お問い合わせ、内容についての要望は武田繁典さんまで (TEL/FAX.0727-63-4171)
- 参加費：100円+カンパ

チコロナイ・アイヌ語講座

- いやでもわかるアイヌ語 -

- 日 時：4月13日(土) 14時～16時
- 資料代：1期(6回分)で2000円
- 問合せ：平石清隆 (TEL. 0745-23-5627)

※どちらも会場は緑の地球ネットワークの事務所です。はじめての方もご遠慮なくどうぞ。

JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅徒歩3分、TEL.06-583-1719

本の紹介

紙面の関係でなかなかご紹介できなかったのですが、GENの活動に関して言及のある出版物がいくつか出ていますのでお知らせします。ちょっと古いものもありますが、書店で見あたらなければ、図書館でお探してください。

『へるめす』No. 59 (96年1月10日発行) 岩波書店刊 1,900円

“太行山脈の森” 上田 信

会報の先月号から連載をはじめられた上田信さんが、昨年夏のワーキングツアーの体験をご専門の歴史の話をまじえて書いておられます。

『いま、中国を知りたい』現代農業増刊 (95年7月20日発行) 農文協刊 900円

“黄土高原・郭おじさんの幸せ” 小松 光一

昨冬、郵政省国際ボランティア貯金の現地調査で黄土高原を訪れた小松光一さんが、その時の体験を語っておられます。会報の42号にも“桃源郷”というすてきな文章を書いていただきました。

“緑が結ぶ日中友好の架け橋” 高見 邦雄

黄土高原の状況とGENの緑化協力について紹介しています。

『中国の環境問題』中研叢書1 (95年12月25日発行) 中国研究所編 新評論刊 2,800円

“黄土高原の森林再生” 高見 邦雄

同じく、黄土高原の状況とGENの緑化協力について紹介しています。また、この本にはGENの世話人である深尾葉子さんも執筆しておられます。

情報ひろば
いっしょなかたち

シンポジウム
地球市民へのメッセージ

■持続可能な発展のための市民の貢献
を考える国際シンポジウム
地球市民へのメッセージ

～地球・環境・市民 そして新しい
ライフスタイル～

国内外からパネリストをまねいて開
発や環境問題の現状と課題を語り合う。

●会 期：3月29日(金)～30日(土)

●会 場：ドーンセンター(大阪府立
女性総合センター 京阪・地下鉄谷
町線天満橋駅から徒歩5分)

TEL. 06-910-8500

●入場料：無料

●主 催：大阪府 大阪市 (財)地
球環境センター UNEP

●内 容：

【シンポジウム】

◎3月29日13時～17時30分

・基調講演・パネルディスカッション

【フォーラム】

◎3月30日10時～16時30分

・トークセッション 海外パネリスト
との意見交換
・海外環境事情体験調査派遣者報告会
・国際協力事業活動講演会

【フェア】

◎29日14時～17時、30日10時～17時

・UNEP世界環境写真展
・環境ビデオ上映
・国際協力パネル展
・インターネットによる情報提供

※シンポジウム、フォーラムには参加
申し込みが必要。フェアは自由参加。

●問合せ・申込みは

TEL. 06-372-9345 FAX. 06-372-6127

(株) インターグループ内「地球市民
へのメッセージ」担当係

土佐の柑橘をどうぞ

高知の田中さんから、前回にひきつ
づきはさくとブントンのご案内です。
まだまにあいますので、忘れていた方
もご注文をどうぞ。

●はさく(無農薬、有機栽培)

10kg 3,000円(無選別)

出荷時期 3月上旬～4月上旬

●土佐ブントン(低農薬、有機栽培)

5kg 2L 10玉前後 2,800円

L 12玉前後 2,300円

M 15玉前後 1,800円

※10kg箱もあります。

出荷時期 2月10日～4月上旬

送料(関西620円、関東820円)別途

●申し込み 田中隆一さん

〒781-74 高知県安芸郡東洋町甲浦

TEL./FAX. 08872-9-2500

※売り上げの一部をGENに寄付してい
ただいていますので「GENの紹介」
とそえてお申し込みください。

中古コピー機求む!

以前にもお願いしましたが、GENの
事務所ではお隣のコンビニが店じまい
してから、コピーに不自由しています。
コピー1枚が20分の大仕事になってし
まったのです。

B4サイズまでコピーできて、コン
パクトなもの(事務所が狭いので)が
あまっていましたら、ご一報ください。

編集後記

およそ文学的表現など解さない私に
も、たったひとつ、ささやかな文章へ
のこだわりがあります。「いい文章は、
平明簡潔でわかりやすい」とうのがそ
れで、実は、米国の著述家アシモフが
どこかに書いていたものです。ところ
が、司馬遼太郎氏の訃報に接してはじ
めて気付きました。アシモフの受け売

りをはじめると前から、私は司馬
氏の著作で、平明簡潔でわかりやすく、
さらに味わいのある文章の実物に触れ
ていたのです。胸を躍らせた『龍馬が
ゆく』、穴のあくほど読んだ『燃えよ
剣』... 氏は多くの著作を遺されまし
た。私には未読の作品もたくさんあり
ます。時間をかけて、少しずつ、読ん
でいこうと思っています。(東川)